

ハイデルベルク信仰問答講解説教46「主の祈り」(2012年8月19日 礼拝説教)

【聖書箇所】

神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、わたしたちの荒廃と、御名をもって呼ばれる都の荒廃とを御覧ください。わたしたちが正しいからではなく、あなたの深い憐れみのゆえに、伏して嘆願の祈りをささげます。主よ、聞いてください。主よ、お赦してください。主よ、耳を傾けて、お計らいください。わたしの神よ、御自身のために、救いを遅らせないでください。あなたの都、あなたの民は、御名をもって呼ばれているのですから。』(ダニエル9：18-19)

イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』(ルカ11：1-4)

【説教】

本日は、第45主日、問116-119までのところが与えられています。ここから信仰問答は、「主の祈り」についての問答を始めます。主の祈りほど教会の中でよく知られた祈りの言葉はないのではないのでしょうか。教会学校に通う小さな子どもたちもまず主の祈りを憶えます。わたくしが関係する保育園でも、まだ言葉も片言の小さな子どもたちが、礼拝の中で大きな声で主懸命主の祈りを祈るのです。おそらくわたしたちがキリスト教に触れる時に最初に会おう祈りが主の祈りです。

昔から教会では、十戒や使徒信条と並んで、主の祈りを重んじてきました。これらを「三要文」と呼びます。三つの要の文書です。多くの信仰問答がこの三要文を扱い、その中で主の祈りに触れています。昨年の八月から読んできたこのハイデルベルク信仰問答もまた最後のところに主の祈りの問答を置きます。それはこれまで問答を重ねながら丁寧に信仰を紐解いてきたその最後にやはり相応しいものではないかと思えます。言わばここに信仰の集大成がある。結局、最後に「では信仰とは何か」と問われた時に、わたしたちはこう答えざるを得ない。それは「祈り」であると。人間は神さまに祈るために造られた。ところが罪を犯して祈れなくなった。でもその人間を再び祈ることへ神さまは回復させた。そのためにキリストを与えられた。すべてはわたしたちを祈りへと導くため。わたしたちの信仰についてそう答えてもよいのであります。

わたしたちが祈ること。そこに信仰のすべて、信仰の最後のことがあるのです。祈りが上手だとか下手だとか、主の祈りを憶えたら次のステップへということではないのです。ここがすべてであり最後です。小さい頃から語っている主の祈りに信仰の最後がある、そこにわたしたちは気付いているでしょうか。あの食事の前に祈る小さな祈りの中にすべてがある。天地創造からこの万物が完成に向かう全宇宙的なすべてがあると気付いているでしょうか。その信仰問答を通して、わたしたちはそこに気付かされることになります。そしてそれゆえに祈ることの大切さ、恵みへと導かれるでしょう。

先月の旅行で行きましたマルタでもイタリアのローマでも地下墓地、カタコンベに行きました。今回また新たな発見があったのですが、カタコンベには「魚」の絵が描かれているのは有名な事です。「魚」(イクサース)は一つの象徴で「イエス・キリストは神の子、救い主」という意味がそこに込められています。今回、入ったカタコンベには、魚の他に、希望を意味する「錨」のマーク、そして人が両手を広げている姿勢を描いた絵、オランダというのですが、これは祈りのマークなのです。祈りの絵は初めて見ましたから感動を覚えました。地下墓地というのは、ローマの迫害の中でキリスト者が公に墓を作って埋葬することができなかったため、そのような地下墓地を作る必要があったわけですが、そこは同時に祈りと礼拝の場所でもありました。彼らは地下にもぐり、そこで死者と共に神さまを礼拝し

たのです。暗く死臭が漂う地下で、息も詰まるような、早く外に出たいと思う場所、しかしそこが祈りの場所となる。それほどまでに祈りを求めた。地下に潜ってまでも祈りを求めたのです。それはなぜか。そこに信仰のすべてがあるからです。そのことを信仰問答もまた答えています。

問116、「祈りは、神がわたしたちにお求めになる感謝の最も重要な部分」と言います。ハイデルベルク信仰問答は三部構成で、その最後が「感謝」であるということは何度も申しました。はじめに人間の罪、悲愴。次にキリストの救い。そして最後、キリストに救われた者の感謝の生活が記されます。その感謝の生活には二つあって、まず十戒、律法に生きること。そしてもう一つが祈りです。しかもこれが「感謝の最も重要な部分」と言います。

ここで首を傾げてしまう人も少なくないのではないのでしょうか。祈りが感謝とはどういうことか。祈りが叶えば当然感謝するだろうが、叶う前から感謝というはおかしい。それは祈りの理解が異なるところに生じる誤解です。多くの人たちは祈りを願いがごとくのように考えています。願いが叶えばそれは当然感謝になるでしょう。でもわたしたちは祈りが叶う叶わないということではなく、そもそも祈ることができないわたしたちが祈ることができること、そのように祈ることができるようにしてください。神さまに感謝することがこの感謝の意味であります。

祈りとは、当然祈る対象があるものです。それは神さまです。その神さまがそっぽを向いていたら祈りは成立しません。一方通行の祈りほど空しいものはないのです。それこそ独り言であって祈りではありません。でも人間はそのように独り言をつぶやくしかない存在でありました。御前に罪を犯したからです。罪ゆえに神さまとの関係が絶たれてしまったのです。だから祈れない。その祈りは神さまに届かない。今日、読みましたルカ福音書で、弟子たちが主イエスに「わたしたちにも祈りを教えてください」と言ったのは意味深いことです。祈りを知らないのです。それは罪ゆえに自分では、人間単独では祈ることのできないわたしたちの現実を示しています。主に教えていただかなくてはわたしたちは祈れないのです。

そこで主イエスは「祈るときには、こう言いなさい」と主の祈りを教えられます。それはキリストによって初めてわたしたちは祈りへと導かれるということです。それはそこにキリストによる十字架と復活の御業、罪のあがないが与えられるからです。キリストの救いが祈りを可能にする。信仰問答には「神が御自分の恵みと聖霊とを与えようとなさる」とありますが、これは神さまの恵みとしてのキリストの救いを示しています。聖霊はこの救いへとわたしたちを導く神さま御自身の働きです。罪ゆえに祈れないわたしたちほうきをもって救いを請い求めています。神さまとの交わり、神さまと共にある命です。神さまは恵みによってこのわたしたちの求めを開き入れてくださり、

キリストを通して救いへと導き入れてくださるのです。それが感謝であり、わたしたちの祈りの土台となるのです。

そのことを問117では更に具体的に述べることとなります。「神に喜ばれ、この方に聞いていただけるような祈り」とは何か。ここでわたしたちの祈りがいかに間違っているかを教えられます。祈りには祈る対象があるのです。その対象に合わせることでなしに、ただ一方的な、こちらの都合ではいけないのです。これはよく使われる譬えですが、ラジオを聞きたいならば、その聞きたいラジオ局の周波数にこちらのチャンネルを合わせなければなりません。こちらを合わせるのです。けれどもわたしたちの祈りはどこまでも自分中心ではないでしょうか。自分が祈りたい時に、自分の望みを、自分の思う仕方ですべて祈っている。あくまでも自分を変えないで、あちらが自分に合わせてくれるのを待つ。それでは祈りにはならないのです。あるドイツの牧師は「神に響きを合わせる」と言います。こちらを合わせなければなりません。

答えの部分に注目しましょう。ここでは神さまに響きを合わせる三つのことが言われています。唯一のまことの神さまに対して、「この方がわたしたちに求めるようにとお命じになったすべての事柄」を求める。少し分かりづらい表現ですが、この「お命じになったすべての事柄」というのはこの後の問答118、そして119で明らかにされます。主の祈りのことです。つまり主の祈りに合わせるのです。ある日本の神学者は「主の祈りを祈っていれば、私どもはすべての祈るべきことを既に祈っているのだと確信をもってよい」と述べています。ここにわたしたちの祈るべきすべてがあるからです。

ここはもう少し丁寧に述べる必要があります。主の祈りに合わせるということはどういうことか。それはキリストと一つになって祈ることです。主イエスは「祈るときには、こう言いなさい」とおっしゃって、そして御自身の祈りをわたしたちの口に授けてくださいました。わたしたちが語っている主の祈りは、元々、主イエスの祈りであり、主イエスの口にある祈りなのです。その祈りをわたしの口に入れる。それはキリストと一つになって祈るということではないでしょうか。

日本の神学、教会形成を語る上で忘れてはならない牧師、神学者の中に逢坂元吉郎という人がおります。彼は主の祈りについて次のように語ります。「主の祈りはただこれらの文字によってキリストが教訓を語らんために教えたもうごときものではなく、実に実体なる神の啓示を如実に示し、その神人の写映作用をもって、天の父なる神を御子キリストによってわれら人類に映したまい、それから進んでさらに御子の実体の像の姿を、われらの中にますます移そうとせらるるのである。これが主の祈りの目的である」(『受肉のキリスト』より)キリストの実体をわたしたちの中に映す祈り、それが主の祈りだと言うのです。

主の祈りを祈ることは、わたしたちがキリストのからだの部分として祈ること。主の祈りはキリストと共に神の子として御前に回復されていることのしるしなのです。古来、教会では洗礼を受けた者がはじめて主の祈りを祈ることを許されたと聞きます。洗礼はキリストとの一体化であり、わたしたちが罪赦されて神の子とされることです。主の祈りも同じところに向かっている。御前に回復されること。神の子とされる。それがわたしたちの祈るべきすべてであり、主の祈りの奥義がある。

ここに立つときに、第二の合わせるべきこと「この方の威厳の前にへりくだる」ことの意味が分かります。御前にどうあるべきか。罪ゆえに如何に自分が乏しく悲惨であるかを認め、へりくだるしかない。それが御前にあるわたしたちの姿です。「息子と呼ばれる資格はない」と言ったあの放蕩息子の心境です。その姿に合わせること。

そして第三のことは、そのわたしたちが「値しないにもかかわらず」御前に招かれ、「ただキリストのゆえに」そのキリストの執り成し、十字架と復活による罪のあがないと新しい命によって、神さまはわたしたちの祈りを確かに聞き入れてくださるという確信を持つことができる。「揺るがない確信」とあります。

それは人間の熱心さや祈りの言葉の美しさの上に成り立つものではありません。そういう人間の作り出すものに祈りが聞かれる根拠があるのではない。キリストによる罪の赦しと御前に回復された命こそが祈りの土台であり、祈りが聞かれる揺るぎない確信となるのです。そこに焦点を合わせなくてはなりません。これから信仰問答は主の祈りを学びますが、このことをまずわたしたちは知る必要があります。

キリストと一つになって祈る幸いがここにある。祈りはわたしたち人間の単独の行為ではない。あるいは聞かれるか聞かれないかという不確かなものでもない。罪をあがない、御前に回復させてくださったキリストが常に祈りの土台になっていく。主の祈りを教えてくださったように、主がわたしたちの祈りを整え、共に祈ってください。まずそのことをわきまえることが大切ではないでしょうか。そこから祈りは本当に神さまにつながるものとして人知を越えた大きな広がりをもつものとなる。そこからわたしたちは祈りの世界に入ります。祈りをささげます。